

2022/4/20-2

(うと Q 世話し 石橋を叩いて壊す 後編) 書庫版



要するに彼らは難民になった位ですからリスクがあるのは当たり前。当たり前だから一つや二つ増えたって余り関係がない。むしろ「ない」と言われた方が変だ、怪しいと思ってしまう流儀。

少なくとも「何かをしなくてはならない事」だけは直感的に分っている。

一方我が国の高学歴者は「リスクがないのが当たり前」で育ってきた。

ある場合には誰かが「取り払う迄待つ」のが常道だという流儀。

だから「身の保証が 100% 確保されない限り」動かない。身の保証ができる身分ではなかった当時の自分は話を聞き、動く相手としては「論外」だったという事の様だ。

しかし今、会社はおろか国さえも「社員、国民の安全と安心の保証を 100% 確約できずにいる」状況です。

このような状況下で

「石橋を叩いて渡る」

事はおろか

「石橋を叩くだけで渡らない」

行為の度が過ぎますと

「石橋を叩き過ぎて壊してしまう」

事態を招き、結果渡る橋を失って「何処にも行けないまま立ち枯れの頓死」をする事にもなり兼ねません。

江戸時代の鎖国が終わって既に 150 年有余。なのに我が国国民精神的には未だ維新の文明開化は訪れず四海を閉ざしたままの鎖国状態である様な。

諺を使って重ねて申せば

「対岸の火事」

もアマゾン川や揚子江の下流程も幅があれば「対岸の火事」で済みますが、川幅（河幅では

なく川幅) がちょろちょろ流れる小川程の距離であれば類焼、延焼は必然。

「対岸の火事」等と言ってはいただけますまい。

そうして是まで全世界で進められてきたグローバル化というのは、実はこの「河幅を川幅に縮める」事も同義。

類焼、延焼の確率が日々高まっていたのです。

そうして今回。

その「ヤバさ」に気が付いて今度は世界が「ナショナリズム」に舵を切り始めましたが、これは逆に取りも直さず「川幅を河幅へと距離を拡げ」更には「石橋を外す」行為と同義語でもあります。

確かに類焼、延焼は幾分食い止められますが、代わりに「こちらが渡る或いは人々が渡ってこられる石橋」がなくなる事で「何処にも行けず誰も来ず」の「立ち枯れ頓死」のリスクが高まってもいる事を我々は強く認識すべき様な気がしております。

少なくとも次代の事を考えれば、次代からの目線も意識、認識する必要がある様に思われます。もんのすっごく嫌な奴でしたが、言っている事だけはまともだった在籍していた吸収合併された方の会社での元同僚の「言だけ」借りれば

同時代もさることながら

「後工程(次代)はお客様」

だそうですから。